ひとりごと

# 「瀬戸の花嫁」

私は香川県高松市出身である。高松市民は「瀬戸の花嫁」を聴くと、駅のホームを思い出して涙を流す。

――生まれてから高校卒業まで 18 年間過ごした高松を離れ、上京したのは、今から 10 年前のこと。上京すると、圧倒される量の人・モノ・情報に接して、親元から離れたこともあり、わずかな時間に、体験したことのない速さで大人になったような気がした。人は、人・モノ・情報に触れ、経験を蓄積して成長する。東京には、その糧がとんでもなく多い。現に、上京当時、東京出身の同級生は随分と大人っぽく感じた。

そんな考えが幾らか変わったのは、上京して 2 年経った梅雨の終わりの時期、東京に来てから雨の匂いを忘れたことに気づいたときだった。高松にいたとき、そろそろ雨が降るサインは土の匂いだった。また、東京ではビルに阻まれ、夏でも入道雲がよく見えない。コンクリートに無数にいる赤い点のような虫もいない。ホーホーホホーと鳴くキジバトもいない。高松にあり、東京に無いものもまた、こんなに沢山ある。

重要なのは、周囲のあらゆる事物に好奇心を示すこと、そして、その好奇心をたぐって、日常に当たり前のような顔をして潜む宝物を見つけ出すこと。小学校の担任の先生が仰っていたことを思い出す。この言葉もまた、そんな宝物の一つである。

東京で暮らしていると、時折、周囲の流れの速さの中で、生き急がなくてはいけないような気分になる。その時、想いを馳せるのは、高松にあった無数の宝物であり、その道しるべとなっている「瀬戸の花嫁」である。

(H. K)

「教育委員会月報　令和６年４月号　No.894」

文部科学省

・**発行・著作** 文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課
・〒 100-8959 東京都千代田区霞が関 3-2-2
・TEL : 03-5253-4111（代表）
・URL : https://www.mext.go.jp